

学位(課程博士)論文審査及び最終試験報告書

2017 年 2 月 13 日

人間文化学研究科長
早 木 仁 成 様

学位論文審査委員会

審査委員長 熊 田 俊 二

審査委員 迫 田 久 美 子

審査委員 清 水 寛 之

審査委員 野 田 春 美



本学学位規則第8条の規程により、論文審査の要旨及び学位の授与に関し

下記のとおり報告いたします。

記

学位申請者	范 一 楠
論文題目	日本語学習者のノダの使用と習得に関する研究 — 〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉の違いを中心に—

論文審査の要旨

1. 本研究の位置づけ

非母語話者による日本語習得の研究において、ノダは重要なテーマである。先行研究は多いが、日本語母語話者による使用と学習者の使用との異同については、明らかでない点がある。本論文は談話展開の方向性という観点を導入することにより、母語話者と日本語学習者のノダの使用の違い、及び学習者の学習環境による習得の違いの一面を明らかにしている。

2. 本論文の特色と評価

第一に、調査方法の特色をあげる。本論文は、雑談資料とインタビュー資料を用いて、誤用だけでなく、正用・非用・適切な不使用を含む、学習者のノダ使用の全体を調査対象としている。そうすることによって、学習者独自の使用傾向や規則を明らかにすることに成功している。従来の、目につきやすい誤用から出発した研究や、正用の習得順序に注目した研究とは異なる点であり、評価される。さらに、雑談資料やインタビュー資料で見られた傾向について、その妥当性を検証するための質問紙調査も行われている。その結果、学習者が相手の認識を修正する際にノダを使用する傾向など、日本語教育に有益な知見が得られている。

第二に、分析の観点としては、談話展開の方向性に着目し、〈承前のノダ〉と〈後続のノダ〉に大きく二分して、考察を進めている。ノダの用法を細分化した研究もあるが、文脈への注意の向け方という認知的側面を考慮した本論文の観点は、明確である。母語話者が、従来典型的な用法とされてきた〈承前のノダ〉よりも〈後続のノダ〉のほうを多用しているという指摘も、その〈後続のノダ〉の習得が学習者にとって困難であるという指摘も、データの緻密な分析によって導き出されたものであり、説得力がある。また、大きな二分を基本としながらも、その下位分類、さらに談話のトピック構造、各文の発話機能など多角的な分析も行われており、言語現象に誠実に向き合った研究であると言える。学習者にとっての文脈の理解や、自然な談話展開の習得の研究という面で、今後の発展も期待できる。

第三に、学習者の習熟度と学習環境を厳密に区別して分析を行っている点にも特色がある。OPI (Oral Proficiency Interview) によって習熟度を判定した上で、質問紙調査を行っている。その結果、ノダの習得においては、中級と上級というレベルの違いよりも、JFL (Japanese as a Foreign Language) 学習者と JSL (Japanese as a Second Language) 学習者の違いという学習環境の影響のほうが大きく、JSL 学習者のほうが母語話者に似通った傾向を示すことを指摘している。学習環境と日本語習得の関係という面でも、今後の発展が期待できる。

3. その他 (申請要件充足の確認)

予備論文提出の時点で査読付き論文が2本発表されており、1本が掲載予定であった。その後、予定通り掲載され、査読付き論文は3本である。申請要件は充足している。

4. 判定

以上のように本論文は、適確な調査と綿密な分析によって、母語話者と日本語学習者のノダの使用の違い及び学習環境による習得の違いについて、重要な指摘を行った研究であり、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。